



「津軽じょんから」

会員 若林 擴

東北地方の厳しい冬と過酷な農耕生活から逃避する農民の口説き節から始まったといわれる「じょんから節」は、津軽三味線の一の糸で強烈な音を出して先ず聞く者を驚かせ、二の糸は一の糸の音を三の糸に巧みに繋ぎ、三の糸の意外に繊細で流麗な音が聞く者の魂を揺さぶるといわれている。

三味線は400年の歴史を持つ、中国の三弦（サムチェン）が琉球に渡来し、サンシン（三線）又は蛇皮線となり、永禄5年（1562年）琉球から堺の町に入ったこの蛇皮線を、最初に盲目の琵琶法師達が手にした。琵琶を三味線に持ちかえた琵琶法師の中小路は、蛇皮線をピック（水牛の角などの義爪）で弾く事をやめて、扱いた慣れた撥で弾く為、胴の大きさを一回り大きくした。そして琵琶法師の石村検校によって、入手し難い錦蛇の皮を犬又は猫の皮に張り替えて改良した。沖縄では今でもマレー錦蛇の皮を輸入して使用している。

琵琶法師は、三味線の最低音を受け持つ一の糸を、上駒という糸を支える部分から外し、糸が棹にふれるたびに余韻を響かせる、琵琶で工夫されていた「さわり」をそのまま三味線に応用した。この「さわり」という一の糸の音が二の糸、三の糸に共鳴して発する共鳴音、人為的な余韻を取り入れることによって、三味線の音に日本独自の工夫の「音の曖昧さ」及び「美しき余韻」が加わり三味線は日本独自の音として瞬く間に庶民の間で受け入れられたが、アラブの弦楽器にもこの「さわり」があり、それを「ZAWARI」と称するのが面白い。世界一弾くのが難しいと言われるインドの弦楽器シタールにもこの共鳴音の「さわり」が付くようになっていた。

100年の歴史を持つ津軽三味線は打楽器である。ダイナミックな音を出すために、棹は堅い紅木の太棹、胴は鳴りを良くするように柔らかな花梨で、中棹、細棹の胴とは異なり、分厚く一回り大きく、どんなに叩いても破れないように、新内、長唄の猫の皮とは異なり犬の皮を深く被せて貼っている。撥は強く叩いても折れないように、先端の開きは柔軟な鼈甲を貼り付け、握りの才尻は水牛、象牙、黒壇、紫檀、花梨、合成樹脂等から出来ている。

三味線弾きは、盲目の琵琶法師の時代から、明治大正の津軽じょんからの三味線弾きまで、不幸にして盲目に生まれついたか、貧しい東北地方の人々が医学の恩恵を受けることなく、流行り病にかかった結果盲目となり、止むを得ず、生活の手段として按摩か三味線を習った。

津軽の三味線弾きは、門に立ち、当時の民謡に唄付けとして三味線の伴奏を付け、更に唄の前弾きに工夫を凝らして独自の派手な手を考え、曲弾きをして人を集め、小銭、米、野菜等を貰って生活をしてきたが、何の芸もなく只物乞いする門付けの乞食とは異なるというのが、昔の琵琶法師や津軽三味線弾きの誇りであった。

新内節は劇場音楽から離れ、座敷浄瑠璃や街頭に進出して、「新内流し」等の特色を出し、庶民の根強い人

気を得るようになった。吉原を代表とする遊里の里を流すと芸妓、客の心を掴み、あまりにも哀調を帯びたその節回しに誘われ、吉原では心中が流行ったそうだ。

新内語りは遊郭を流し、呼ばれて座敷で浄瑠璃を演奏する他、門に立ちお金を稼ぐことが「門付け」や「乞食」の類のように思われるようになり、映画やテレビの劇中の新内語りが遊びの果ての若旦那と足抜きした花魁、芸妓の成れの果ての、哀れで情けないイメージを残した。

貧しかった津軽では、昔、三味線は3本の糸が付いていれば何でも良く、糸が切れたら結んで使い、撥は板切れでも良く、女の櫛で弾くこともあったそう。糸巻きが壊れたら只の棒を差し込んで間に合わせた。それでも高橋竹山は誰よりも良い音を叩き出したという。

沖縄では戦後、物が無い時代に胴を空き缶で作ったカンカラ三味線や胴を重箱で作った洪紙を貼ったサンシンで演奏した。ハワイには葉巻の空箱を使ったシガーボックス・ウクレレがあった。九州には隠れキリシタンが弾圧を逃れて穴の中に信者が集い、密かに賛美歌の伴奏をしたという、低音で音が鳴り響かないよう、板張りの箱に棹を通し3弦を張った「ごったん」という私も持っている箱三味線があった。

「津軽じょんから六段」の三味線を弾くだけなら6ヵ月もあれば弾けるようにはなる。しかし津軽の「かまり（匂い）」をもって演奏する事は、東京人にとってには至難の業であるといわれているが、今や津軽生まれの優れた三味線弾きを数える方が難しい。

写真の象牙の大きな撥は、新内の本手用、小撥は新内の一オクターブ高い上調子用、握りとなる黒水牛の角の才尻と先端の開きに鼈甲を貼り合わせた撥は、才尻に私が勘亭流で「若」の一字を彫り、漆を流し入れた津軽三味線の撥である。

